



パリのホテル・スクリブのバルコニーにて(1999年) Photo: Dance Europe

ローラン・プティ ROLAND PETIT

1924年1月13日、フランス、ヴィルモンブル生まれ。
2011年7月10日、スイス、ジュネーヴにて没。

DE: どうして口論になったんですか？

RP: 価値観の違いだね。ものの見方が、何もかも違っていたんだ。ただヌレエフは私の中に、自分自身と同じくらい厄介な存在を見ていたのだと思う。私は決して彼の言うなりにならなかったし、彼が我を通そうとすれば、余計に強く主張した。ある意味ヌレエフは、自分の力に反発してくる人間が好きだったんだろう。たとえばマーゴのことは、とても尊敬していた。ヌレエフと踊るマーゴは、それは可愛らしく美しく。それも彼女自身が魅力的でパワフルだったからなんだ。ヌレエフが本当に尊敬していた女性は、マーゴだけだったと思うね。マーゴの方でも、ヌレエフをどう扱えばいいか、じつによく分かっていた。

DE: バレエだけでなく、ミュージカルやレビューも振り付けてこられました。

RP: バレエと、レビューやテレビ、映画、美術、音楽とを別物として取り扱う理由が、私には分からないよ。私にとっては同じもので、一つの作品にあらゆる要素を詰め込みたいんだ。

DE: 1944年に、20歳でパリ・オペラ座を離れた理由は？

RP: 第二次世界大戦の末期で、何もかもが政治に影響されていたから。バレエ団には対独協力者と、それに対立的な立場を明らかにしようとしていた一派がいて、私は後者に強く誘われていた。セルジュ・リファールは親独派だったが、私に振り付けてくれたこともあって、よく知った仲だった。だからたとえ事実であっても、「リファールは親独派だ」などと喧伝したくなかった。それで、先の見えないまま退団したんだよ。

幸い父が——別に裕福というわけではなく、身を粉にして働いていたんだが——シャンゼリゼ劇場で一回公演するだけの資金を出してくれた。それで最高のオーケストラと指揮者と衣裳を揃えて『旅芸人』を発表したところ、大成功を収めたんだ。ロンドンでも、たいへんな評判を取った。父のお金を無駄にせずにするんで、本当に安堵したよ。

DE: 時計を巻き戻して、もう一度舞台に立つとしたら？

RP: ジャン・ジロドゥを演りたいね。ジロドゥは20世紀最高のフランス文学者で哲学者でもあり、こんなことを言っている。「人は指一本、視線一つで踊れる。そして、臨終の時まで踊れるのだ。」(訳: 長野由紀)

初出: Dance Europe December 1999/January 2000

ローラン・プティが逝去したのは、イングリッシュ・ナショナル・バレエによる『カルメン』『若者と死』『アルルの女』のトリプル・ビルの初日の幕が開く15日前のことでした。プティはロンドンでの最終リハーサルに立ち会う予定にしていたのですが、体調のせいで叶わずに逝くこととなりました。

今月号の日本語ページでは、本誌に1999年に掲載されたインタビューの抄訳を掲載します。本人以外には誰にも不可能な明晰さで人生を語るこの一文をもって、偉大な振付家の追悼したいと思います。

ダンス・ヨーロッパ(以下DE): あなたのバレエには、愛と死に触発されたものが多いですね？

ローラン・プティ(以下RP): バレエには二種類があって、抽象的な作品にすることもできる。でも本当にいいバレエでは、最後には誰かが死んでしまうんだよ。『白鳥の湖』には、恋人たちの死で終わるものと、二人が結ばれるものの二つの結末があるけれど、どちらがいいか、質問するのも愚かなことだ。私が読んできたものはどれもそうだったが、シェイクスピアの芝居でもゲーテでも、最後には人が死ぬ。なぜなら、それがベストな終わり方だからなんだ。死とは、生きている人間に起こる最大の出来事であり、最悪の事態でもあるんだ！

DE: 今世紀最高のダンサーたちにも、たくさん振り付けておられますよね。特に印象に残っているのは？

RP: ヌレエフだね。私たちは親友であり、敵でもあった。いつも言い争いをしていたんだよ。だがその彼も死んでしまった。友達も皆いつかは死んでしまう。ヌレエフの亡くなる三週間前に妻のジジ・ジャンメールも交えて三人で食事をしたんだが、そのときヌレエフは、「今夜は自宅で眠るけど、明日はまた入院だ」と言っていた。そして、二度と退院することはなかった。彼の代わりは誰もいないと思うとじつに寂しいし、誰しも同じ気持ちだろう。ヌレエフは特別な存在、桁外れの怪物で、私は彼をととても愛していた。